

資料紹介

肥前永田遺蹟弥生式甕棺伴出の鏡と刀

坪井清足
金 閔 恕

ここに紹介しようとする鏡と刀は、昨秋佐賀県神埼郡東脊振村三津永田遺蹟で弥生式中期後半の様式をもつた合口甕棺に伴出したものであるが、後者は特に従来知られていなかった弥生式時代における刀の使用を示す資料として重要である。

この合口甕棺は花崗岩の地山を掘り込み、水平と約五五度の角度を保つて埋置され、保存佳良な成人男性骨を中に容れていた。屈葬された遺体は頭部から肩にかけて水銀朱が塗られていた。副葬品として流雲文帯五獣鏡が下甕の底に鏡背を下にしてたてかけられ、棺外には甕の合せ目の目張りの粘土中に刃を内に向けて鉄製素鏡頭大刀がほぼ水平に封じ込められていた(第一図)。棺の直上約一米のところには長さ一九〇糎・幅七五糎・厚さ三〇糎ほどの矩形の平面をもつた石があり、その下面に朱が残存していたことからこれが甕棺の標識としておかれたものではないかと想像されるが、これについて明確な結論は得られなかつた。

資料紹介(坪井・金閔)

さて第二図に示したこの流雲文帯五獣鏡は、鏡面・鏡背共一部分緑錆に覆われており、良質の白銅で鑄造されたらしく、錆のない部分は灰白色の光沢を失っていない。鏡背には、外区の流雲文帯と、内区の獣帯の間の帯圈に銘文が環つている。文字はやや不明瞭なものもあるが

「委言之紀造鏡如、蒼龍在左白虎在右、宜善賈孫子」

と判読される(樋口隆康講師の教示による)。この形の銘文は多く方格規矩四神鏡に伴うもので、この種の獣帯鏡に伴つた例は稀である。鏡式から推してこれは後漢初頭をそれ程下らぬ時期に作られたのであろう。

一方鉄製素鏡頭大刀は、第三図に見られるようにやや内反しており、つくりの上で身と莖に区別がなく、莖の全部には把卷の痕が残つている。出土の際鈍の少部分を欠いだが保存は比較的良好である。吹き出た鉄錆を除いて測つた結果、現存長五〇・二五糎、身長三五・二糎、莖長一二・一糎、闊幅二・三糎、鏝の直径五・八糎という數値を得た。これもまた船載品と見るべきであらう。

次にこれらを出土した遺蹟について簡単な説明を加えよう。佐賀平野と玄海灘に面した筑前西端の低地との分水嶺をなす脊振山塊は、佐賀平野の東部で數条の丘陵を南に派生している。風化した花崗岩の地山で構成されたこれらの丘陵は弥生式時代の遺蹟に富んでおり、

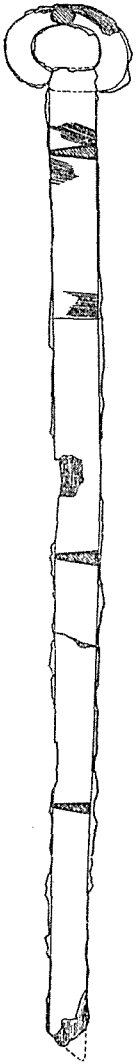
鳥栖と佐賀のほぼ中間にあたる神埼駅から北方約四軒を隔てた永田遺跡もこれ等の丘陵の一つに営まれたものである。鳥栖から飯町を経て神埼に通じる県道がこの丘陵を東西に切断し、丘陵は切断部で東に張り出している。昭和二八年夏の水害を受けたこの附近を流れる城原川の護岸の為にこの張出部の採土工事が始められ、採土中保存佳良な人骨を含む多数の弥生式甕棺が出土した。破壊されて行く遺跡の原状と遺物出土状態を記録することは緊急を要したので、昭和二八年一月七日から八日間と同年一月二三日から八日間の二度に亘て坪井清足・金岡憲・小野山節が地形測量を主とする調査に趣き、前記の甕棺を含む一一組の合口甕棺を調査し、他に五組の出土位置を確めた。これ等の結果から、この遺跡は弥生式前期から中期後半にかけて営まれたものであり、甕棺は調査した範囲内では丘陵稜線から南斜面の中腹にかけて点在又は群在して分布していることを知り得たのである。なお鏡と刀を伴出した甕棺は丘陵稜線に近い地点で極近接して出土した四組の甕棺中の一つであるが、これ等の棺蓋は出土状態と甕の様式から見て、互いに時期を異にして埋葬されたと推定される。

われ／＼の第一次調査直前に出土した石蓋のある甕棺に容れられていた双禽鏡と、七田忠志氏がすでに報告していられる（佐賀県文化財調査報告―第二輯―）内行花文光明鏡を併わせて、永田遺跡では三面の鏡が出土したことになる。これまで北九州における甕棺副

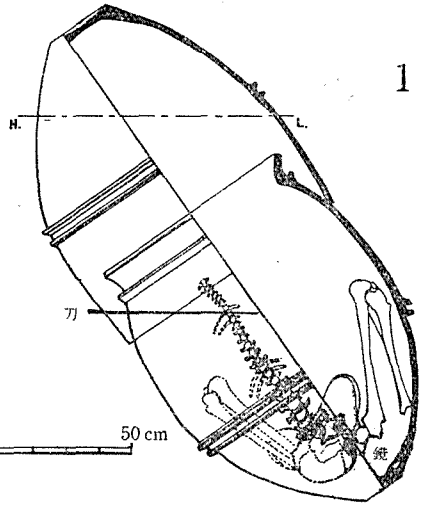
葬品としての鏡の分布は玄海灘に面した古代末盧・伊都・奴の諸国に限られており、脊振山塊を隔てた有明海側の地方では佐賀県神埼郡仁比山村出土という一例より知られていなかった。それ故この遺跡で出土した三面の鏡は脊振山塊南側では甕棺伴出鏡の最初の確実な例であり、これ等が一遺跡で出土したことは、大陸文化流入の交通路にあたる玄海灘側の地方だけでなく、この地方でも既に当時かかる品が受け入れられていたことを物語っている。

これまで弥生式時代に刀が使用されたことを例証する資料としては佐賀県唐津市桜馬場で得られた断片以外に知られていなかったという点から、この刀の出土は同時代におけるその存在を明確に示すと共に、古墳時代もさ程早からぬ時期を出現の上限とされていた鉄製素鍔頭大刀が弥生式時代にすでに存在することを告げているのである。

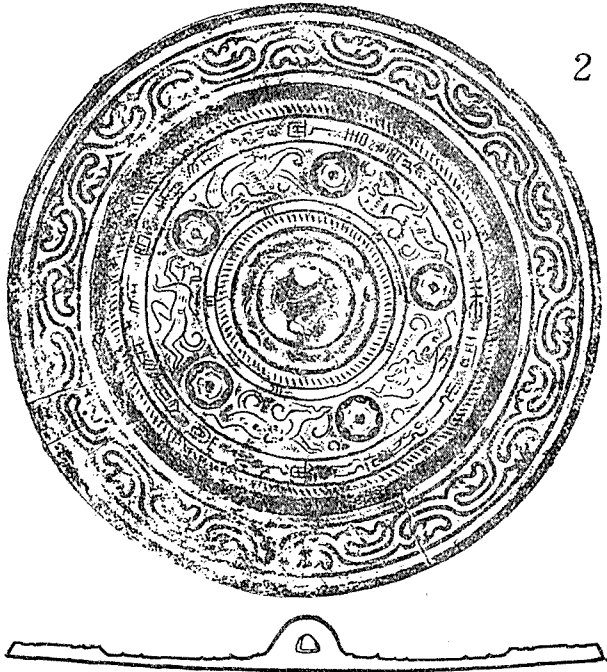
従来多くの縄文式時代の人骨と、比較的少数ではあるが古墳時代人骨が得られていたが、弥生式時代人骨のまとまつた資料は皆無に近い状態であつた。しかも古墳時代人は現代日本人と体質的に直接繋つているのに対して縄文式時代人はこれと相当なひらきがあり、この空白を埋める意味においても、又農耕文化流入の問題を説明する意味においても弥生式時代人のもつ意義は重要である。従つてこの遺跡はかかる点で極めて貴重な資料を提供しているのである。



3



1



2